

ベトナム独立戦争の戦跡めぐ

ド・カストリーの司令部跡

【ベトナム近代史概略】

フランスは、ベトナムの統一を実現していたユエ政権と協定を結び、メコンデルタの一部の割譲を受けたが、農民の激しい抵抗にあったフランスは全土の直接支配を目指し1882年にはハノイを攻撃。ユエ政権は形骸化し、全土を保護下におき、実質的に植民地化した。懐柔策、分断策で支配の強化に努めたが、搾取に苦しむ人民は北部・中部の農村を中心に排仏運動を激化させていた。

1940年ヨーロッパでフランスがナチスの侵略を受けると、日本は北部ベトナムに侵攻し、南部にも進駐した。「大東亜共栄圏」である。日本はフランスとも協定を結んだため、ベトナムは二重支配をうけることになる。日仏双方は激しい弾圧と略奪を繰り返す。共産党はベトナム独立同盟会（ベトミン）を結成し、抗日・抗仏の武装蜂起が展開することとなる。日本の無条件降伏によるポツダム宣言では北部は中国（蒋介石）が、南部は英国が日本軍の武装解除を分担することになっていたが、英国の支援でフランスの再侵略がはじまり、北緯15度線以南はフランスの支配下となった。

北部ではホーチミンが1946年、総選挙で圧倒的な勝利を収め、ベトナム民主共和国の成立に繋がる。これに抵抗するフランス軍はハイフォンやハノイで、加えて南部でも戦闘を開始。これが第一次インドシナ戦争である。戦闘は長期化し、1954年3月ディエンビエンフーにおいて、フランス軍が降伏することとなる。

中国（中華人民共和国）と旧ソ連はベトナム民主共和国を承認。南部は疲弊したフランスにアメリカがとって代わり、長いベトナム戦争に入る。サイゴンが陥落し、ベトナムの統一が実現する。1975年である。

その後、あろうことか、中国の軍事進攻まで受けて、20年掛かって修復。教条的な政策による失敗も踏まえながら、「ドイモイ」政策により改革開放路線を選択し、今日を迎えている。

ド・カストリーの司令部跡

フランス軍のディエンビエンフーの総司令部跡である。当時の地下壕はこの周辺の農村の少数民族を使役にかりだし、丸太を天井に渡し、鉄板を敷き詰めた上に、2.5mの厚さに土を積み上げ、さらにその上にカマボコ型の天板で覆われていたと言われる。内部は中央通路の両側に部屋が設けられ、ド・カストリーの指令室、フランス政府と常に連絡をとるための通信室が設けられていたと言われる。今日では、観光資源としても活用できるよう、史跡として、新たに整備されたもので、史実と異なるしつらえがあるやに聞く。周辺のトレンチライン、それを築造する土囊にセメントを詰め込んだ強固な壁などは史実なのだろうか？

作り上げられたしつらえであっても、これによって、ディエンビエンフーの歴史的意味が失われるものではない。ここをベトナム人や西洋人のツーリストが訪れていることに感動するものである。



↑ 取り囲むトレンチライン（塹壕）



↑ 記念碑レリーフ。たたずむベトナム人。



← カマボコ型の天板 →
この下に司令部の部屋が。
カマボコ型天板上に兵士の持つベト
ミン旗が翻る絵柄がシンボル。
表記はベトナム語のみ。わからない。





←地下壕内部の壁。土嚢にセメントが詰め込まれたもので構築されている。史実かは不明。



↑地下壕内部の部屋。



←戦闘の概要図だろうか？部屋に掲げられている。ベトナム語のみの手書きである。判らない。



司令部の部屋→
説明文らしきものがあるが、
これまた、ベトナム語。判らない。



←これも司令部部屋。
説明文はフランス語
も添えられている。な
にやら配置された各
部隊の兵士数が書か
れているようだ

指令室→
この程度の広さ。



←動画

よく知られた記録映像である。ド・キャストリー司令部が陥落し、ベトナム旗が翻る瞬間の映像。この映像が勝利のシンボルとして使われる。さらに苦難の歴史がここから始まる。1975年まで。